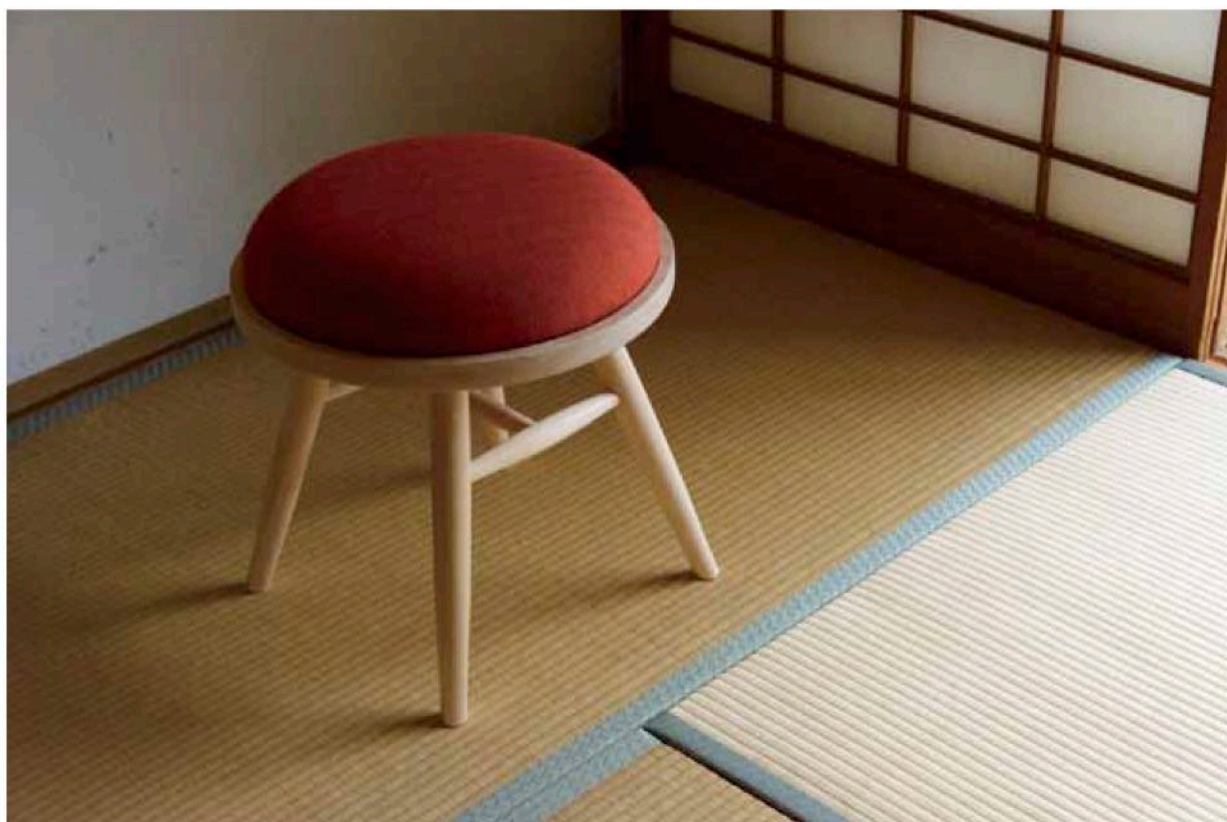


FUEIKI

VOL.60



特集

がんばる若者を応援

原田謙介さん

がんばる若者を応援

身の回りや生活の中にある
政治を意識するように
若者と政治をつなぐ活動を広げる

NPO法人ユースクリエイイト代表 原田謙介さん



若者は社会を創り、社会を担う新しい力……。今夏の18歳選挙権導入を前に主権者教育の重要性と必要性を訴え、活動するNPO法人「Youth Create(ユースクリエイイト)」代表・原田謙介さん。岡山の地から全国へ、若者と政治をつなぐ必要性を発信していきたい、という思いを財団は応援しています。

——「若者と政治をつなぐ」活動のきっかけは何ですか？

原田…インターンで国会議員の事務所でお手伝いをしていたときに「政治が若者とかみ合っていないなあ」と感じた。若い人が政治のことをあまりにも知らなさすぎるし、政治家からも若い人が見えていないと思った。そうになると、若者のことが政策から後回しになるのも否めない。若い人と政治家の間に立つて両方を引き合わせ、もつとくつつけることはできないかと思つて活動を始めた。

——その活動が目指しているところはどこですか？

原田…「仕組み化」。仕組みとは気づかれないような仕組み作りをしたいと思つている。高等学校で生徒が政治と関わるワークショップをやっているが、生徒にとってはひとつのイベントであつて、「特別なこと」として捉えている。プログラムを作つて仕組みとして学習の中に組み込めば、生徒の方も政治を「特別なこと」としてではなく、すんなり受け止めてもらえると思う。

例えば、若い人と政治家が出会う機会を作

る「Voters Bar(ボータズ・バー)」は、単発ですが全国各地で何回も開催しているうちに、普通のこととして認識されるようになって、これが仕組みとして他へもどんどん広がっている。

——学校教育と政治とのかかわりについて感じていることは？

原田…主権者教育においても義務教育段階までに何を、どうしておくかというのはとても大事なことだと思う。小、中、高、大のそれぞれの段階でどういうレベルでの教育をしておくか、カリキュラムをどうするか、そういう「仕組み化」ができれば、積み重ねと広がりが出て、選挙権を持ったときにどういう投票行動が取れるか、自ずからわかる。

——義務教育での「仕組み化」はどうでしょうか？

原田…街に出て消防署や橋や道路を調べて地図を作る、商店街のおじさんやおまわりさんに話を聞くなどは、どの小学校でも社会の授業でしていると思う。しかし、教えている先生や教わっている子どもたちの方に、見たり調べたりしていることが、政治とどうつながっているのかというイメージがない。横断歩道や防犯灯も「あれつて政治だね」と一言、学習の中にエッセンスを加えることで、授業の組立にも学習にも幅や深みが出てくるし、子どもの考えの中にも身近に政治を意識できるようになると思う。

中学校の公民や小6年生の社会科で学習





原田謙介

1986年岡山生まれ。愛媛県愛光高校、東京大学法学部卒。大学3年時に、20代の投票率向上を目指し「学生団体ivote」を設立。卒業後の2012年4月インターネット選挙運動解禁を目指し「One Voice Campaign」を立ち上げる。2012年11月Youth Createを設立し、「若者と政治をつなぐ」をコンセプトに活動。地方議員と若者の交流会「Voters Bar」の全国展開や、行政・企業とのコラボ企画。2014年衆議院選挙時には有権者と政党の双方コミュニケーション企画「ASK NIPPON 2014」を実施。2015年6月には参議院に、参考人として招致され、「選挙権年齢引き下げ」に関して意見陳述を行い、文科省・総務省が2016年秋に作成し全高校生に配布した「政治や選挙等に関する高校生向け副教材」の執筆にも携わる。全国の多数の中高での出前授業の実践や、教員向け研修会・模擬授業などを行う。

2016年4月より岡山大学にて実践デモクラティックラーニングの講師として、大学生の主権者教育を進めている。

内閣府子ども・若者育成支援推進点検・評価会議委員／岡山大学講師：実践デモクラティックラーニング(2016年4月より)／岡山県若者参画促進アドバイザー(2015年度)／長崎県大村市選挙啓発アドバイザー(2016年4月より)／文部科学省「政治や選挙等に関する高校生向け副教材」作成委員／平成26年度内閣府青年社会活動コアリーダー育成プログラムドイツ派遣団／World Forum for democracy 2014日本代表／世界経済フォーラム、グローバルシェイパー東京HUB

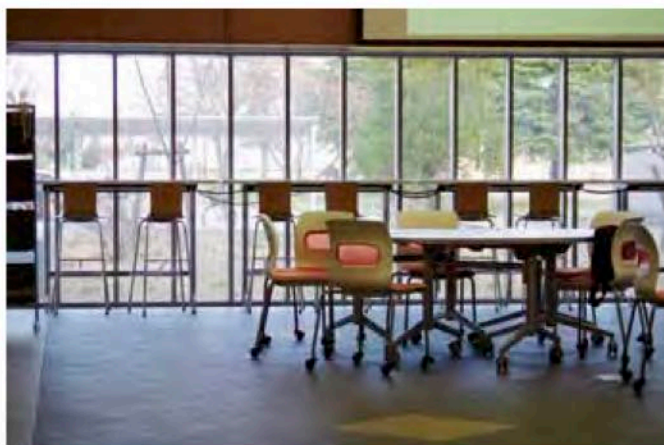
写真：「若者の参画する街岡山」キックオフイベント！(2016年3月20日、岡山大学国際交流会館)

撮影：守安涼(吉備人)

——今後の活動はどういう方向へ？
原田：考え方を二つ持っていて一つは探検

地域でゴミ拾いのボランティア活動をしているときに、誰かが「今度、区長選だよね」っていう話をすれば、それだけで盛り上がる。「町もこう変わってほしいよね」って政治を目的にしないで、結構突っ込んだ話題が出てくる。小学校の学習と同じで、この活動をしていることは自分自身が政治と繋がっていると感じてほしい。政治とのつながりの意識がないままでは、活動の広がりや相乗効果の面からも限界があると思っている。ボランティア活動のゴミ拾いの仕掛けが、政治を意識するだけで街を活性化する仕組みとして機能し、街にとってより良い形が現れるようにしていきたい。

家のイメージ、もう一つは開拓者のイメージ。
探検家はその人が行きたいだけで、最初にルートを発見して行きつけば、これが成功。結果として道を示しておくのが探検家。道を示すだけじゃなく、地ならしをして町を作り、人が住みやすくするのが開拓者。主権者教育は探検家から開拓者の段階に入っている。これまでの政治と若者をつなぐプログラムや仕組み作りを冊子にして、誰もが利用できるようにしていきたい。探検家としては政治と若者をつなぐ、今やっているのとは別のルートも発見していきたい。
岡山では多世代をどう巻き込んでいくかを試したい。大学を起点として、若者その他の世代を、そして地域も巻き込んでいく活動を広げていきたいと思っている。



することが政治だと思ってしまっている中で、日常生活や学習の中で政治に触れるという意識が乏しい。必要なのは政治を学ぶだけではなくて政治とどう関わるかをしっかりと教えて意識させていくこと。義務教育の段階からしっかりと関わっておかないと高校生になっても意識しないまま大学生になったり、社会に出て行ったりしてしまう。僕たちがやっている活動は政治や経済の授業の延長ではなく、自分たちの身の回りや生活の中にある政治を意識してもらうことです。実際にはなかなか難しい。

——家庭教育では、どうお考えですか？

原田：学校教育と家庭教育のはっきりとした違いは、家庭では政治に中立じゃない話ができる。家庭では「お父さんはこの政党を応援していて、こういう理由でこの候補者に投票する」とか、子どもは「自分はこう思う」という話が当たり前にできる。中立じゃない議論のスタートができるというところに家庭の良さがあるのかなと思う。「父さんはいま会社でこんな仕事をしていて、こういう政党に関心がある」という話を普段からしてもらいたい。政治に関わって大人の生き方を見せられる、ここが家庭の面白さ、良さだと思う。

——社会教育の面ではどうですか？

原田：世代も職業も価値観も違う人がたくさんいるから面白いので、それを生かさない、と思う。



「ここに生きる、ここで創る」フォーラム

黒瀬仁志 × 大月ヒロ子 × 片山康之 × 高本敦基

コーディネーター 吉備人出版代表・山川隆之

地域資源をリノベーション

第5回となる今回のテーマは、
地域資源をリノベーションした「文化の拠点のつくりかた」。
地域資源をどのように活用しているのか。四氏のお話をまとめました。

(2016年1月11日、Junko Fukutake Hall)



世界中から
人が集まるような
場所を目指して

「ルネスホール(旧日本銀行岡山支店)は新しく建てることはできないと直観した。それと同時に、非常に魅力を感じ素晴らしいもの、インスピレーションを与えてくれるものと思った。初めてのことなので十年間試行錯誤でやってきたが、ある程度、我々の考えで成果が出せるという自信ができた。

レストラン棟と地下にアジアで有数の録音スタジオが出来上がることによってプランが全部完成するので、そこまでがんばりたいと思う。フランスにカンスという小さい田舎町がありますが、映画祭をすることによって世界中から映画関係者の人が来る。そういう場所にしようと壮大な夢を持っている。

次の十年でルネスがやることは、自分たちで事業をやることではなくて、文化的な感覚が高くて、経営的なノウハウを持っている人材を育てることだと思っている」

NPO法人バンクオブアーツ岡山
特別顧問

黒瀬仁志氏

1960年岡山市出身。慶應義塾大学経済学部卒業。山陽ヤナセ総合企画株式会社 代表取締役社長。現在、岡山県後楽園魅力向上委員会会長、岡山商工会議所文化観光委員会副委員長を務める。岡山の新たな文化・芸術の創造拠点「ルネスホール」誕生に携わる。



コミュニティの中で
日々きちんと暮らせる場所を
みんなで作っていききたい

「住み続けて使っていた家をクリエイティブリユースの実験室兼レジデンスの拠点とアイデアアールラボとしてリノベーションした理由は、個人の家をもう少し地域に開く、オープンにしていこうと、地域の中の共有の資源になってもいいのではと思ったから。

ラボでは料理を一緒に食べるということを大切にしている。地域の方やワークショップに参加された方と、玉島の食材で料理してみんなで作る、あつという間に仲良くなる。

コミュニティというのは、歩いて行けるぐらいの範囲を思っていて、そのコミュニティの中で日々きちんと暮らせる場所をみんなで作っていかたい。ゆつくりとどんなに時間がかかってもかまわないので、やっていければなと思っています」

IDEA R LAB(アイデアールラボ) 代表
ミュージアム・エデュケーション・プランナー
大月ヒロ子氏

1956年倉敷市玉島出身。武蔵野美術大学造形学部卒業。板橋区立美術館学芸員を経て独立。ミュージアムづくり、展覧会監修、空間デザインを行うIDEA,INC.代表取締役。著書に『クリエイティブリユース——廃材と循環するモノ・コト・ヒト』(millegraph)、『じぶんでつくろう こどものしゅげい』(福音館書店)他多数。教育・デザイン・研究領域・絵本でグッドデザイン賞、キッズデザイン賞、国際児童図書評議会賞など。2013年に倉敷市玉島にIDEA,INC.の一部門としてIDEA R LABを開設。





一緒にやろうという
場みたいなものは
形成されてきた



本当に行きたいという人が来て、
そこに作家がいて
小さい交流があつて、
それが積み重なって
最終的には大きくなる



岡野屋プロジェクト 代表
美術家
高本敦基氏

1980年広島県呉市出身、真庭市勝山在住。金沢美術工芸大学油画専攻卒業。Nancy国立高等美術大学大学院 美術専攻修了。岡本太郎現代芸術大賞特別賞、岡山芸術文化賞グランプリ(2014)。真庭市立中学校非常勤講師。2010年から旧岡野屋旅館を拠点に展開する岡野屋プロジェクトの活動を始める。2015年度福武文化奨励賞受賞。

撮影：青地大輔

「旧岡野屋旅館を見て、その美しさにはつとした。建築家の個性ではなくて、勝山の風土を知り尽くした大工が作った様式美の建物。そこにアートを展示したいなと思った。岡野屋の場合は建物ありきのプロジェクト。建物の力が強いので、建物が使われるということと地域の注目を集めた。何かしたいと思っている人たちの思いが、最終的に建物に対する魅力に向かっていったことが、最初の原動力になっているのかなと思っている。『まずできることをみんなでやりましょう』というのが勝山の町づくりのキーワード。展示会以外の用途は、将来的にはできたらいいなという議論しているんですが、今は自分たちの力でできる展示会をしていくことを大事にしたい」

一般社団法人クリエイターズラウンジ 代表
美術家
片山康之氏

1978年倉敷市児島出身。倉敷芸術科学大学大学院芸術研究科美術専攻修了。岡山県美術展山陽新聞社大賞(2008)、岡山芸術文化賞準グランプリ(2009)、マルセン芸術文化賞(2009)。吉備高原学園高等学校講師。2010年からクリエイターズラウンジ(2014年から一般社団法人)の活動を始め、2015年に吹上美術館を開設。

「自由に使える場所を探していたときに紹介されたのが旧美術館だった建物。この建物をどうしたらいいですかという打ち合わせを地元の町内会とか自治会長さんとか行政の人が入って、十回二十回、何回も話し合って最終的に美術館でいきましょうと。吹上美術館は一日平均五人、十人なんですけど、それはそれで続けていくというのは積み重ねられることなのでいいかなと。一回のイベントが千人とか二千人とかの規模でなくて、一回十人を百回のように、大きい一回じゃなくて少なく何回の方がいいんじゃないかと思ってる。倉敷の人口的にもそれぐらいがちょうどいいんじゃないかと思ってる」



岡山大学

「国吉康雄を中心とした 美術鑑賞寄付講座」とは？

新年度から岡山大学に開講した

「国吉康雄を中心とした美術鑑賞寄付講座」(国吉寄付講座)に、
当財団は30周年記念事業として寄付いたしました。

国吉寄付講座では「何を教え」「何を学ぶ」のか、
講座を担当する才士真司准教授に
聞きました。

Q.1 国吉寄付講座の期間は？

2015年10月に、岡山大学教育学部に
準備室が設置され、講義は2016年4
月から始まり、2017年3月までです。

Q.2 国吉寄付講座の最終目標は何でしょう
か？

地域の芸術文化資源を活かした美術鑑賞
手法の開発と地域の芸術文化資源を活か
せる人材の育成です。

Q.3 どのような科目がありますか？

美術理論や美術史のほか、クリエイ
ティブ・ディレクター養成とアートとコ
ミュニケーションの4科目で、担当教員
は山口健二教授、赤木里香子教授と江原
久美子准教授の4名です。

Q.4 美術理論や美術史は、どのような授業内
容ですか？

体的には写真をアレンジしたり、演技を
したり、映像作品を制作してみるアート・
ワークショップから、取材活動を組み込
んだフィールドワークを取り入れた授業
になります。

Q.6 アートとコミュニケーションでは？

この講義では「コミュニケーション」って
何だろう？という問いについて考えて
いきます。世界には「言葉」を使わずに何
かを伝えようとしているもの、写真や絵
画、映像などデジタルによって表現さ
れたものがあふれています。それらをど
う読み解き、そしてどのように「言葉」で
伝えるのか。これは、これから生きていく
子どもたちにとってとても重要な課題だ
と思っています。

Q.7 「国吉康雄」は寄付講座とどのように関わ
るのでしょうか？



Q.8 どうして「国吉康雄」なのでしょう
か？

岡山は国吉康雄の出身地で、国吉康雄寄
付講座が始まる前から国吉研究や顕彰活
動の中心のひとつでした。岡山の美術館
や個人コレクターが所蔵している国吉作
品は約七百点。これは世界最大の規模で
す。これまでに蓄積されてきた岡山での
研究や顕彰活動を元データとして使い、
基礎研究の拠点として岡山大学を位置付
け、グローバル化した世界において、多文
化主義を受け入れる重要性を提示してい
きます。

Q.9 学生には何を学び得てほしい
ですか？

学生には何を学び得てほしい
学生を連れて地域にでかけ、い
ろいろな人たちに取材をしな



才士真司

岡山大学国吉康雄寄
付講座准教授。2013
年、直島で開催され
た「国吉康雄展〜ベ
ネッセアートサイト

直島の原点」での映像制作、空間演出以降、
アートイベント「国吉祭」を岡山で仕掛ける
など、国吉康雄関係の研究・顕彰プロジェ
クトを企画、プロデュースしている。

Q.5 クリエイティブ・ディレクター養成では、
何を学ぶのですか？

研究を行うために必要な専門的知見と方
法の基礎についての授業ですが、後半では
「ベネッセアートサイト直島」をフィール
ドとして、現代アートと社会情勢との関
係について考えてみたいと思っています。



から課題をみつつけ、どのような表現手段
を使えば解決できるのかを自分で考え、
資金調達まで体験してもらいます。その
中で、発注と受注、指示回答のように言わ
れてやる、指示があつてやるというよう
な関係性を地域の中で築くのではなく、
自分の経験とクリエイティビティをセン
ターに置いて企画、制作、運営できる人に
育ってほしいと思っています。

国吉康雄展一少女よ、お前の命のために走れ

会場：そごう美術館(横浜駅東口そごう横浜店6F)

期間：2016年6月3日(金)～7月10日(日)

世界一般初公開の大作「クラウン」他

スミソニアン・アメリカン・アートミュージアムから
の凱旋作品、多数公開

関連サイト：

<http://www.fukutake.or.jp/ec/kuniyoshi-atoz.html>

父の食卓

福武美津子・文



父、福武哲彦（現ベネッセホールディングス創業者）は1916年生まれです。母親が校長先生、父親が教頭先生という一風変わった家庭で育ちました。小学1年生のときは、母親が校長先生を務める学校に通っていました。ある日、お腹が空いて早弁をしていたところを見つかりました。母親である校長先生は、わが息子が校則違反をしたのもう怒り心頭です。「哲を追え……！」と言って、学校中の先生、生徒、みんなで哲彦少年を捕まえるのに必死。あっけなく捕まった哲彦少年は廊下に立たされたそうです。

父は師範学校卒業して教師になりました。その後1944年県庁の職員となり、満州へ滿蒙義勇団の指導に派遣されました。満州は数カ月滞在したようですが、お酒を飲んだときには、大草原を騎馬隊が勢いよく駆け抜けていく勇ましい競争の話を目を輝かせながらよく語ってくれました。そして、いつか自分も大草原をだーっと駆け抜けて行くことを夢のように思っていました。

仕事から帰宅すると父は背広を脱いで、そそくさと下着とステコ姿になり、隣の畑に行つて野菜の世話をしました。それが終わると、風呂に入り夕食です。まずは、ビールで喉を潤し「ああ、美味い！」といったものの夕飯が始まります。食卓には軽く炙ったためぎし・煮しめ・青菜のお浸し・煮魚・時にはヒレ肉のステーキ

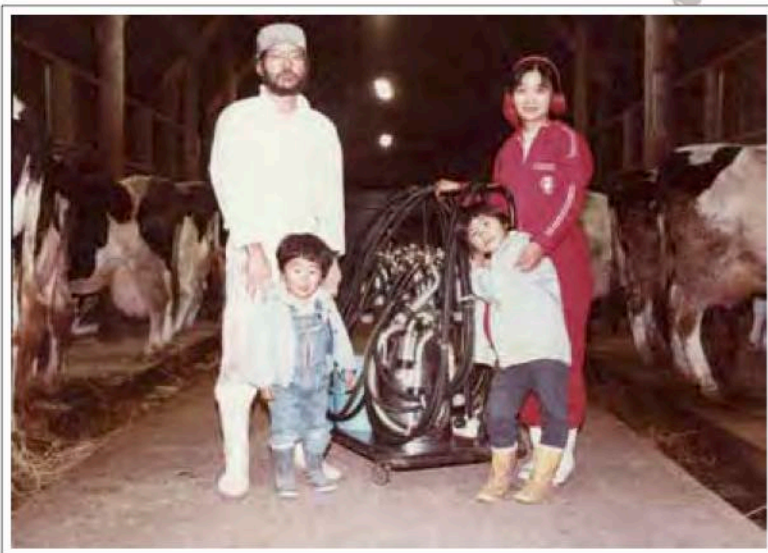
キです。お酒が進むにつれ父は仕事の話や漠たる夢を語っていました。今思えば、それは私に「生きるって最高なんだ、夢をもって進め」と言うメッセージでした。

その夕食が私にとっては本当に楽しい時間でもあり、今の私の原点です。畑の野菜は白菜、大根は漬物用です。ねぎ・ほうれん草など種をまき、芽が出て少し大きくなったら、間引いてそれを塩もみして割りたての鰹節をかけて食べてました。今はあまり見ませんが、鰹節と割り器があり、青菜のお浸しなどは必ず引き立てをバラバラとかけて「これがええんじや」と言って美味しそうに食べていました。

ネギや木の芽など、香のする薬味は必ず食事には欠かせません。例えば魚の塩焼きには、しょうがと大根おろし。もししょうがが無かったら「おい、しょうがが無いぞ。すつてくれ」と父。母「買うのを忘れた」父「何しよんじや！しょうがが無かったら美味くないじゃねえか」こんな会話はしょっちゅうで、父の言い方は正に雷が落ちたくらいの勢いで言うので子ども心にビクビクして、「怒られないように」といつも思っていました。でも父に怒られるのはイヤではなかったです。なぜか「本当に私が至らなかった」と思う反省するんです。

今私が飲食業に携わっているのも父と食事をした時間がとても貴重なことだったと思います。

「我が家に休みはなし」



吉田牧場は1984年に夫婦で始めました。今は、息子家族とともに営んでいます。子どもたちも家業を継いで欲しいと思ったことも、言ったことも一度もありませんでした。私自身、親の希望する仕事に就きませんでしたし、子どもは親の言うことに従わないものだと思っています。

北海道大学を卒業してサラリーマンになりましたが、雑誌「暮らしの手帖」に掲載されていたチーズを手作りする老夫婦の記事を読んだことがきっかけで、チーズづくりに興味を抱いて4年余りで脱サラしました。郷里の岡山に帰ってフェルミエを始め準備を始めた頃、長女5歳で長男2歳でした。一番手のかかる時期でしたが、「我が家に休みはなし」と決め、朝は4時起きで働くという毎日でした。当時は開業するため借りた資金を返済し、チーズ作りを軌道にのせることで精一杯の日々でした。苦だと思ったことはありませんが、息子は「大変な仕事だな、やりたくないな」と思っていました。

一年中一緒に生活していましたから、ふつうのサラリーマンよりは子どもたちのことを見てましたし、会話していたと思います。長女は小さい頃から牧場の手伝いをよくしてくれていて、高校生になっても、牛の面倒をみて、シャワーを浴びて学校へ行っていたほど。息子は全く関心がなかったので、継ぐなら長女かなとぼんやり思っていました。

息子が家業を継ぐに至るまでは紆余曲折ありました。家業を継ぐと言われたときは嬉しさ半分、不安半分でした。一度は家を追い出したことも。ヨーロッパへ修行に出してから本格的に息子とふたりで吉田牧場を営むことになり、7年ほど経ちます。親子でも性格や考え方が違いますし、育った時代も環境も違うので衝突することはしばしばありました。いろいろなことを経験したり失敗している創業者とその基盤のうえに乗っている二代目は、何度言っても伝わらないことがあります。結局言葉で弱いのでしよう。言って聞かせるより、態度で見せるしかないかなと。

「息子だから継いでいるのではない。この仕事に誰よりも真摯に向き合えるのは僕だからだ」と思っていて欲しい。友人たちからは「厳しすぎる」と言われますが、息子との距離感はかなり難しいところだ。（談）

吉田全作 フェルミエ（チーズ農家）

1955年岡山県岡山市生まれ。北海道大学農学部畜産学科卒業。1984年吉備中央町に「吉田牧場」を開業。土地に根ざし牛を放牧し、餌や牧草にこだわり、おいしい乳を搾り、独学で究極のチーズを作り続け32年。全国に多くのファンを持ち、有名レストランの一流シェフたちからは絶賛され、入手の困難さから「幻のチーズ」と呼ばれている。2007年（第8回）福武文化賞。



河原彩花
(かわはらあやか)

1989年生まれ。岡山市(旧御津町)出身。県立大安寺高校卒業。福山市立女子短期大学卒業。2012年山村シェアハウス(美作市)へ山村留学後、2015年から事務局長としてだっぴの活動に携わる。

NPO法人だっぴ

進路や働き方を模索する若者と社会をつくる魅力的な大人が交流する場を提供し、若者が“だっぴ”していく場の創出と様々な人がつながっていく場の継続を通して地域の未来を豊かにしていくことを目指している。2013年設立。
<http://www.dappi-okayama.com/index.html>

FACE

NPO法人だっぴ 事務局長

河原彩香

「視野が広がる機会を届けたい」
働き方に疑問を感じていた頃、“だっぴ”と出会って
「もっと自由でいいんだ」とスイッチが入った……。

「小学校の頃からいじめが始まり、中学校時代が精神的に一番つらかった。学校の中での関係性ばかり気にしてましたから」と当時を振り返る河原さん。高校を卒業すると岡山を離れて広島島の短大へ進学。卒業後はフリーターを2年ぐらいいして、思うところがあり岡山に戻りました。1年間、服飾関係の職業訓練学校通い、サービス業に就職するもなぜ働くのか、どのように働いていけばいいのかと疑問を持ち、働き方についてきちんと向き合わなければと思ったそうです。

友人の先輩だった藤井裕也さん(NPO法人だっぴ 副理事)の生き方に興味を抱き相談に行きました。「じゃあ、こんな活動も

あるよ」と教えてもらったのが“だっぴ”の活動でした。「面倒くさいな」と思うような迷いながらも、とりあえず行ってみたら、こんなに面白い人がいっぱいいるんだと、パカッと視界が開けて、もうちょっと自分の人生を考えてみようと思った。それから仕事を辞めて、だっぴのスタッフとして、ミーティングのファシリテーターをしたり、スケジュールを作ったり、先方との調整に携わっています。

だっぴの活動には、50人のゲストと50人の若者の出会いの場“だっぴ50×50”、親や学校の先生以外の大人に高校生が出会える場“高校生だっぴ”、働く人と若者との交流の場“企業だっぴ”、だっぴ50×50を少人数制にした“ぶちだっぴ”などがあります。最近では、地域と大人と中学生が出会う“中学生だっぴ”も始まりました。「大人なんて」とずっと思っていたけど、だっぴの活動を始めて、親も先生も子どもたちのことをこんなに一生懸命に考えてくれていたのだと気づいたそうです。「だっぴに参加してなかったら、自分のことを好きになれてないと思うし、会えなかった人もいっぱいいると思う。何より自分のことを認めてくれる仲間と一緒にいてくれるのが嬉しい。中学生には視界が一気にひろがる瞬間を体験してもらいたい」

だっぴの仕組みが地域に残るようにプログラムをパッケージ化したり、受け入れ体制を整えたり、人材を育てたりと課題はたくさんあるそうですが、確かな手応えは感じているだっぴの5年後、十年後の脱皮が楽しみです。



瀬戸内国際芸術祭2016

夏—2016年

7月18日[月・海の日]—9月4日[日]

49日間

秋—2016年

10月8日[土]—11月6日[日]

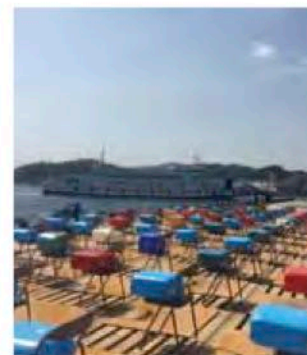
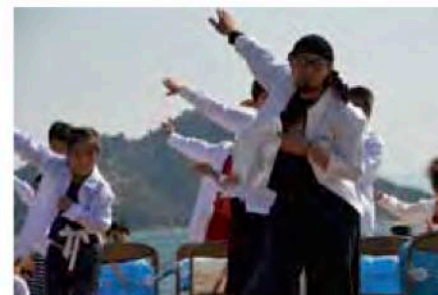
30日間

会期総計—108日間

瀬戸内国際芸術祭に行こう！



3月20日、宇野港では地元玉野の高校生や市民を中心に、全国各地から集まった約百名によるタップダンス「玉野SEA1000人達歩〜船出」の音が鳴り響きました。ラヴェルの『ボレロ』で始まり、瀬戸内海と棚田をイメージした曲にのせた躍動感あふれるパフォーマンスがオーピングを彩りました。



「玉野SEA1000人達歩〜UNO 音(ON)」(7/18夏期オープニング)、「玉野SEA1000人達歩〜新世界カーニバル」(10/8秋期オープニング)の参加者募集中。詳しくは達歩団〜1000人達歩(タップ)公式ホームページをご覧ください。<http://1000tap.com/>

Cover Photograph



田中園子

Tanaka Sonoko

写真家/1975年東京都生まれ、岡山市在住。関西学院大学社会学部卒業。2014/「PHOTO」(gallery-A-zone)、APAアワード2013写真作品部門入選、「NTMY ISSUE.2 EXHIBITION」(青森県十和田市現代美術館 Towada Art Center)、2010/写真集「3DK」刊行、2012/岡山県美術展覧会写真部門奨励賞

表紙写真：木工房ようび/HOTARU stool

<http://youbi.me/>

撮影協力：あわくら温泉 元湯

<http://motoyu.asia/>

つながる 田中園子

西粟倉村の森林へ入った。最近間伐されたことで、森林には日が差し込んで明るく、枝葉が積もった地面はとても柔らかかった。道なき斜面を登っていく途中、動物の糞を見つけたので「ようび」の奈緒子さんに伝え、「そりやそうですよ。こは彼らの場所だから」と笑った。眼の前にはミツマタの黄色い花がどこまでも広がっていた。そうか、こんな森林で育ったヒノキからこの椅子が出来たのか、と思う。人の入らない深い森とアスファルトが続く人間の世界のちょうど中間点。動物と植物と人間とが共存し、古代から未来へと流れていく時のつなぎ目のような世界。そして「たたら」から続く人々の営み。これらが交差するこの場所で、この椅子は生まれたのだ。

場所はうつり、同じ西粟倉村にある「元湯」の一室。畳の上に椅子を置く。森林の香りが漂うこの椅子は、これからどれくらいの人を迎え入れるのだろうか。そして、今回私がこの椅子を介してたくさんの人と出会ったように、どれくらいの人々が交差していくのだろうか。椅子の奥に広がる無数の見えないつながりを感じながら、シャッターを押した。

Editor's Column

■設立30周年となる節目の年、今号より広報誌「FUEKI」(不易)を一新しました。デザイン、イラストはタケシマレイコさん、表紙写真は田中園子さん。従来よりも、しなやかで柔らかなイメージにリフレッシュされました。■増ページしても誌面は限られています。掲載しきれない内容は、財団ホームページで詳細をご覧くださいことができます。不易なものを大切にしながら、時代の変化に対応する、なくてはならない公益財団法人を目指して、更に人づくり、地域づくりに貢献できればと思います。■瀬戸内国際芸術祭2016は、好評のうちに春会期が終了し、来る7月18日に夏会期が開幕します。2010年に始まったこの芸術祭は、従来の大型アートイベントの枠を超えた、大きなインパクトを内外に与えました。当財団では、小中高大学生の引率をされる県内の先生方を対象に、申請により鑑賞パスポートをご提供しますのでお問い合わせ下さい。(O)



公益
財団法人

人づくり、地域づくりを応援します
福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17

株式会社ベネッセコーポレーション本社3階

TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190

URL:<http://www.fukutake.or.jp/ec/>

E-MAIL:eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 **不易** FUEKI vol.60 2016.5.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作:株式会社吉備人

デザイン・イラスト:タケシマレイコ

印刷:株式会社三門印刷所